

試し読み版

アフター
ヤブヌマ
二度目の温泉旅行

空蝉

挿絵・猫丸

原作・ナオト。

イクル N.O.D. WORKS



Contents

目次

第一章	旅行出立前の夫婦の対話	4
第二章	初めてを捧げた夜〜三か月前の秘密〜	31
第三章	乱れ交わる心と身体	90

登場人物

Characters

浅岡 智

(あさおか とも)

三十代前半の会社員。妻・咲美とは結婚してから五年が経つ。最愛の妻を醜い肥満中年に抱かせる寝取られ性癖に囚われる。

浅岡 咲美

(あさおか さくみ)

智の妻で一児の母。明るく健康的で素朴な愛らしさがあり、気は強いが心根は優しく、清廉で快活な性格。夫の寝取られ性癖に共感を示し、藪沼との関係が続けている。

藪沼 幹夫

(やぶぬま みきお)

咲美のパート先の副店長。推定年齢五十代後半、不格好な外見で、上の者には媚びへつらい、目下には偉ぶる性格。精力絶倫で、性技に長けている。



第一章 旅行出立前の夫婦の対話

夫婦の危機を乗り越え、性癖を共有する道を選んでから、もう一年が経とうとしていた――。

「しも智、お味噌汁おかわりする？」

十二月第二週の土曜日。今朝も変わらず健康的な声音と笑顔の妻――さくみ咲美が語りかけてくれる。それがなによりの幸せなのだと身に染みていればこそ。

「ん。もう満腹。ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

鈴音のごとき声で応じる愛妻に対し、自然と柔らかな表情を向けられもする。

所定の椅子に腰かけてテーブルを家族三人で囲み、朝食をとる。休日出勤するため締めたネクタイの位置を気にする夫を見て、手を伸ばすやてきはきと正してくれた妻。これから夕方まで預けられる祖父母宅での出来事に早くも胸躍らせている様子の愛娘。誰かが言葉を紡げば、必ず誰かが笑顔で返す。いつもより少し賑やかで、いつ

もとなんら変わらぬ温かな空気が食卓にひしめいている。

「智美もともみご飯綺麗に食べたね。偉い偉い」

「うん！」

褒められ、頭も撫でてもらった愛娘が、妻の隣席で満面の笑みを浮かべ、元気な応答をした。それがまた心地よく、いつまでもこの時が終わらなければいいのにといい気にさせる。

「おトイレも一人で行けるかな？」

「いけるよっ。行ってきまーす」

自慢げに胸を張ってから、駆け足でトイレへ向かう姿は、愛らしいのと同時に頼もしい。日ごとにできることが増え、手がかからなくなる。子供の成長の早さには驚かされるばかりだ。

智美も、もう四歳。夫婦二人から家族三人になって、もう四年も経つのだ。

咲美と、そして智美。家族で歩んできたこれまでを回顧しかけて、己の目尻の潤みに気づかされる。三十代も半ばに近づき、最近急に涙腺が緩くなった。

慌てて回顧を取りやめ、目やにとる風を装って目尻を拭いておいてから、妻の顔を仰ぎ見る。

「ふふ」

咲美は、全部察してるといわんばかりの優しい笑みで出迎えてくれた。きつと、娘の背を見つめて物思いに耽り始めたところから見られていたに違いない。

そこまで理解しても、気恥ずかしさは生じない。代わりに胸にひしめいたのは、より温かな想い——愛情と呼ぶにふさわしい感情だった。

「咲美の方こそ、そろそろ準備いいの？」

全身に循環するそれを満喫しながら、問いかける。

「うん、もうお化粧もしたし大丈夫」

夫に正面から見つめられ、照れたようにはにかむ。その様がまた一段と、愛と——嫉妬を駆り立てる。

（これから咲美は……僕の妻は、別の男と……）

一泊二日の温泉旅行に赴く。床をともし、身を貪られることを目的とした旅行に赴くのだ。

（妻を愛する夫としては許し難い、そう思うのが当たり前で……事実、僕だって今まさにほらわたが煮えくり返ってる）

けれど、それほど愛する妻だからこそ、穢される姿を見たいとも思う。

(だから僕は間男の提案したこの旅行を。僕の性癖をよく知るあの男の提案に飛びつくように……許可をした)

それは咲美も承知の上だ。

(妻が他人に汚される様に性的昂奮を得てしまう、この、僕の性癖を一度は拒絶し、別居までした……それでもパートナーでいたいと、戻ってきてくれた。咲美は、僕のことを想って不貞を働く)

貞操観念が人一倍強かった咲美にそうさせることを心苦しく思う一方で、「そんな咲美だからこそ」との思いが——情念と呼ぶにふさわしい熱量と勢いで盛り狂う。

許しを乞う色合いも含みつつ、悦びの色濃く宿る瞳で咲美を捉え見ずにいられない。改めて見つめて思う。この一年で、咲美は変わった。

化粧もすっかりとするようになったし、全体的に女を強調するような服が増えた。それが元々の整った顔立ちや均整の取れたプロポーションを際立たせているせいだろう。地味な格好をしていた以前に比べ、最近は一緒に歩いていても男の視線を感じる。ことが格段に多い。

夫の目から見ても、咲美は美しくなった。元々の健康的な魅力を損なうことなく、華やかさと艶っぽさを身につけ、女に磨きをかけている。

そんな彼女の伴侶はまぎれもない自分なのだという誇らしさを覚える反面、彼女を今のよう仕立てたのは自分ではない、という自虐が胸を刺す。

一年前から月一回のペースで咲美の身を貪るあの男——やぶぬまみきお藪沼幹夫こそが咲美をここまで女の女に磨きあげたのだ。

（あの、外見も中身も醜い性欲の権化。咲美を貪りたいがために、夫である僕に寝取らせ性癖を吹きこみ、咲美の心と身体を淫らにすることに執心する。あの、最低最悪の男こそが）

夫以上に咲美に変化を促したのだ。その過程は欠かさず録画され、後日送付されてくる。それこそが夫と間男の間で取り交わされた契約であり、最低最悪と罵りながらも藪沼を咲美の相手に据え続ける最大の理由だ。

「駅で待ち合わせてるの？」

渦巻く嫉妬をひた隠し、とうに答えを知る問いを口にする。

「うん」

俯き、小声で答えたその姿は、申し訳なさを湛えているようにも、期待に火照る顔を隠しているようにも捉えられる。

「家に迎えに来させればよかつたんじゃないか」

これもまた。答えを知る問いかけ。

「家には入れないって決めてるから」

艶めかしさも、期待（しているように見える様）も束の間消して、ぴしゃりと告げられる。その姿が、藪沼と関係を持つ前の彼女と重なって見えた。

「そっ……か……」

彼女の内にある線引きが揺らいでいないのを確かめることで安堵したい、との気持ちも確かにあった。

今日、これから咲美が行く先は、藪沼が初めて咲美の身を食った温泉宿。提案者である藪沼にとってはまさに思い出の場所であり、きつといつも以上に激しく咲美の心身を貪るだろうことは容易よういに想像がつく。

（藪沼の驚鼻が、分厚い唇が、脂ぎった顔が。ごつい指が、咲美に触れる……）

想像しただけではらわたの煮えくりが一層煮沸する、と同時に、卑しい期待を帯びた肉棒が、スラックスの内側で隆起してしまう。一度火が点いたが最後、瞬く間に身に蔓延いびつして歪な煩惱の只中へと引きずりこむドロドロの熱。それが、肉棒の鼓動に併せてドク、ドクと吐き紡がれてゆく。

咲美を藪沼のもとへ送り出すたび、「これで本当にいいのか」「今ならまだ咲美を引

き留められる」そんな焦燥感伴う思いに憑かれもする。最愛の女性を他人に差し出さねば性的昂奮を得られない己への怒りと、妻への懺悔は、尽きることがない。

「おみやげ買ってくるね」

咲美の氣遣いが、かえって申し訳なさを駆り立てる。

「そんなこと気にしなくていいよ。ゆっくり……してくればいい」

ゆっくりの後に「楽しんで」と続けそうになり、嫉妬と昂奮を糧とする肉棒がまたスラックスの内で嘶いた。

藪沼と身体を重ねている時の咲美は、どの隠し撮り映像でも夫の前では決して見せない表情を露わにしていた。下劣な藪沼の、ねちっこいやり口。そして経験に裏打ちされたテクニク。それこそが、貞淑であろうとする咲美の仮面を剥ぐ。

だから、藪沼でなければならぬ。

(僕の嫉妬を誰よりも煽る、あの男でなければならぬのだ)

「……ごめんね」

夫の内なる葛藤を察した咲美が、詫びの言葉を口にした。それが藪沼との行為をやる気はないとの宣告であるように思え。

「たっぷり可愛がってもらいなよ」

皮肉とも取れる言葉を、知らず知らずのうちに吐いていた。

咲美は夫の性癖を理解した上で、共存する道を選んでくれた。そのことは一年前の一件で骨の髄まで染みてわかっていることだというのに――。

「えっ。や、やだっ」

その「やだ」が「藪沼に可愛がられるのは嫌だ」という意味ではないとわかっている。頬を染めて膨れた咲美は、堪らなく愛らしい。

「楽しみ？」

だから、もう少しだけ見つけていたくて。

「もう。……怒るよ？」

人一倍羞恥心の強い彼女を困らせることになるかわかっているながら。

「楽しみじゃないの？」

腹の内を探るように、重ねて問う。

すがる目つきを添えたのは、そうすれば夫想いの咲美が渋りつつも最後には根負けして答えてくれると知っているから。

夫の卑怯なやり口を咎めもせず、一度息を呑み、トイレの方を見て娘が帰ってこないのを確かめて、口を噤み。

それでもじつと待って、見つめ続ける夫に視線を重ねて、観念したように大きく嘆息して。

「……ちよ、ちよつとはね。ほ、ほら、温泉も入れるし？」

期待通りの言葉を紡ぎ出す。

（申し訳ない視線を送ってくる、それこそが本当の答え）

相変わらず、咲美は嘘が下手だ。そこは大学で出会った当初から変わらない。

もう十年以上のつき合いになるのだ。彼女の拳動ひとつひとつの意味を理解し得るほどの年月をともしして、その年月が培った情愛こそが歪な性欲を下支えする。

（僕では決して引き出せない咲美の淫らな様を、もつと、もつと見たい。そうすること**で強烈な、身をむしるほどの嫉妬に襲われるとわかっていても**）

嫉妬が愛情を駆り立てると知っているからこそ、望まずにはいられない。

「夜は？」

——藪沼に抱かれて、今夜はどんな顔を見せてくれる？

——僕の性癖を知ってなお、ともに歩むことを心に決めてくれた君は、どこまで淫靡いんぴに変わってゆけるのだ。

「もうっ！」

膨れっ面を一層膨らませて。

「はいはい！ 楽しみですよ。そんなこと言うとはントにいっぱい楽しんできちゃうから」

拗ねた口振りと裏腹に赤らんだ頬を期待に緩めている。そのことに気づいてはいない、愛しい君は――。

「ママ。今日も一人でおトイレできた」

「お。偉いぞー。じゃあ、お着替えも一人でできる？」

トイレを済ませ戻ってきた愛娘に向けて慈母のごとき表情を差し浮かべている、その頬を藪沼の手に触れさせ、その眼に奴の卑しく弛んだえびす顔を映し、潤み湛えた唇を分厚い五十路男の口元に重ねるのだ。

ひと月前の動画では、ラブホテルの部屋に入っただけに藪沼に唇を奪われていた。目を剥き驚きながらも、諦めと期待の入り混じった眼を伏せて、奴の肥えた腕での抱擁を享受していた。

「うん！ じゃあ、お着替えしたら髪の毛くっついてえ」

「いつもみたくおさげでいい？」

「うん！」

智美の頭を撫でて、藪沼の背を掻き抱き――。

「じゃあ、いつてくるね！」

着替えの用意してある奥の部屋へと元気に駆け出して行った娘の背に、

「転ばないでよー」

注意喚起する声をかけては、

「わかってるもん」

おしゃまな返答をもらい、嬉しげに微笑む咲美。

（愛しくて、大切な僕の家族。好きで堪らない、僕の妻）

それを間男に差し出す算段をつけたのが、他ならぬ自分。「今ならまだ取りやめにはできる」とこの期に及んで未だ執拗に訴える心の声がまぎれもない本心ならば、妻の痴態に期待を寄せて早くも食卓の下で硬く隆起してしまっているペニスも偽らざる真実。

このまま椅子から立ち上がれば、股間の膨らみは一目瞭然。

（いや、咲美のことだから、とつくに僕の昂奮には気づいてるはず）

その上で、期待を寄せるように視線を寄こしてきている。それは藪沼に抱かれに行くと、ハメ撮りされている最中、欠かさず現れる咲美からのサイン。「どれだけ昂

奮してくれてるの」と問う気持ちの表れに他ならない。

「……咲美」

まだ話は終わってないよと目で告げながら、妻の名を呼び、立ち上がる、そうして近寄り、彼女の期待通りにズボン越しに隆起した男性器を見せつけた。

「あ……」

一瞬呆気に取られていた彼女の頬がサクランボのように色づいて、潤む眼が夫の股間に行き着く。キュツと結ばれた唇の奥で、唾を飲む音が聞こえた気がする。

「今夜は……湯船とかでガンガンやられちゃったり……？」

夫の目に期待が滲にじんでいることに、咲美は気づいている。その上で火照った吐息をこぼし、歩み寄ってくれた。

「……この前まへされた」

夫の耳元みみもとで囁ささやくように、小さく紡がれた言葉。

「えっ？」

隠し撮り動画にはなかった状況の報告に、思わず間抜けな声がこぼれた。

（藪沼が動画の編集過程でカットしたのか？）

咲美と藪沼の情交は一日一度で終わったためしがない。五十代だというのに衰え知

らずの藪沼にとって二度三度は当たり前、過去には五度も「抜かずの再戦」をしてきたこともあった。

だから、動画は必然的に長尺となる。その中で藪沼が不要と判断したであろう場面が短く編集されていたことは過去にもあった。

しかし丸々ワンシーンカットしたというのなら、それは藪沼の失態であり怠慢だ。

（やつは咲美との情事を欠かさず見せるという契約で間男たり得ているのだから。そこを遵守してくれないなら、咲美の身を預ける意味がない）

「あ、あれっ？ 言ってなかったっけ」

夫の表情に宿った剣呑さに驚いた様子で、咲美が語りかけてくる。

「聞いてないし、観てないな……いつ？」

極力怒りを押し殺したつもりが、意図せず低い声音で静かな怒りを演出する形となり、密かに後悔する。咲美を怖がらせたわけではない。これによって咲美の中の後ろめたさが必要以上に膨れ上がって、二の足を踏むようになっては元も子もない。

「ぜ、前回だから、ひと月前だよ」

素直に吐露してすぐ、咲美がしまったという顔をした。彼女の瞳は確かに後ろめたさを今まで以上に強く湛えていたが、夫の引き攣った笑みと、貪欲に見開いた眼、そ

してズボン越しの股間の膨らみの鼓動ぶり、三点を忙しなく行き来し続けている。

（ああ……咲美。やっぱり君は、最高だ）

どこまでも夫に対して真摯であろうとするがゆえに、より不貞行為を際立たせる。そんな自分こそが夫の情愛を最大限煽ると理解していればこそ、羞恥しながらも包み隠さずすべてを曝け出してくれている。

きつと今も、次に来る夫の問いが予想できてしまつて、躊躇ためらいと期待を胸の内ではめぎ合わせているのに違いない。

「どんな風にされたの？」

妻が予想した通りであろう言葉を間髪を容れずに紡ぐ。そうするのが、羞恥心が人一倍強い咲美に口を割らせるうえで上策だと、知っていたから。咲美の煩悶を少しでも長く観ていたいと思いと、彼女の苦しみを少しでも早く絶つてやりたい気持ち。双方がせめぎ合った結果、そろそろ智美が着替えを終えて戻ってくるという状況に後押しされた後者が競り勝った。

「え、ええっ？」

案の定咲美は目を丸くして口ごもる。その瞳の奥には期待していたというような艶めかしい煌めきが確かに宿っていて。

「やっぱあいつとするの、気持ちいい？」

「もう、朝からなに言ってるのっ」

怒った口振りになって、智美が着替えに行つた方をちらちら見ながらも、話を打ち切る気はない。その意思を伝えようと身を預けてきた妻の心情を察して、肉棒が一層滾り。間髪を容れずに伝わつた彼女の身の火照りに心臓がときめき。おずおずと太腿を摺りつけて勃起の熱と硬度を確かめる咲美の艶めかしさに、血流が煮沸した。

咲美の熱っぽい吐息が胸をくすぐる。彼女の確かな意思を感じ取ることで、心置きなく攻勢をかけることができた。

「どうなの？ アイツとのセックス。……いい………?」

「そ、それは……っ」

咲美の見開いた眼の煌めきが、左右上下、あちこちに忙しく移ろつては、決まつて夫の顔色を窺う。その都度「大丈夫。いいから、言つて」と目と、言葉で伝えた。それでも言い洩る妻の手を股間へ導き、よりはつきりと、卑しく鼓動を刻む肉棒の硬度と漲る熱を教える。

「早く聞きたくて。咲美の口から聞きたくて、こんなになつてるんだ」

お願いだから、言つて——。そう耳元で囁きかけたのが、とどめとなつた。

「……う、ん……」

呻くような響き。だが確かに「うん」と妻の唇は発声した。耳まで羞恥に染めた顔を、隠すように頷かせた。

「奴のチンポが一番だと思う……?」

「智っ!」

——言わせないで、

柳眉^{りゅうび}を逆立て、なれど瞳に湛えられた涙のおかげで懇願しているようにしか見えな
い表情で、咲美が見上げてくる。

けれど、攻め手を緩めるつもりはない。涙の煌めきの先に、恍惚^{こうこつ}を欲する眼の揺ら
ぎが見て取れたから。

「僕とする時よりも激しく喘ぐし。失神するまでイクのも藪沼とする時だけだよね」

——動画で観て、知ってるんだ。

——君の身体を労わるあまりにブレーキをかけてしまう僕とするのでは得られない
肉欲の限り。それを卑しい藪沼に与えられて、君は。

「アイツの腰に脚を絡めて、イク……って叫んでた」

「……ッ」

告げられた咲美が引き攣り、息を呑む。呼気を荒くしながら瞳の揺らぎを一層激しくし、握った拳を震わせて。

「……ごめん……なさい」

今にも泣き出しそうな顔と声音で、ついに認めた。

「藪沼のチンポの方がいいんだね」

コクツと頷いた咲美の眼から涙がこぼれる。それを手指で拭って顔を寄せると、自然と彼女も目を閉じ、顎あごを上向かせた。

「ん……」

「ふ……ちゅ……」

ほどなく、当たり前前に夫婦の唇が重なる。今朝のキスも、二人分の涙の塩辛さに満ちていた。

ひと月前、やはり藪沼に会いに行く咲美を送り出す際にした時も、同じ味がした。

きつとこれからもひと月ごと、藪沼と会う咲美を送り出すたびに味わうことになるだろう。切なく、苦く、嘆きと恍惚とをない交ぜにした、この想いとともに。

そしてその都度、確信する。——否、確信し合うのだ。

「愛してる……咲美」

「わた、しも……っ、智……愛してる……っ」

傍から見れば異常極まりない在り方。

(それでも、これが僕たちちなりの……)

夫婦としての在り方だ。

愛情で満たされた心に導かれるように性欲も膨張し、堪らず咲美の腿肉に勃起を押しつける。ほどなく咲美の手のひらがさわさわとズボン越しに撫で擦りついてきて、見つめ合うことをやめない夫婦は鼻息を互いの顔に吹きかけ合う。

「藪沼は……優しくしてくれること、ある……？」

「……と、時々……」

熱っぽい吐息の合間に紡がれた声音は消え入りそうなほどに小さくて、それがゆえにさらに聞き出したくなる。

「相手が藪沼でも、優しくされたら嬉しい？」

「そ、れは……その……普段が普段だから……」

冒頭上ずったのは、凶星だったから。

語尾に至るほど早口になり、声が小さく潜められたのは、心苦しきの表れだ。

咲美は、普段の藪沼が下劣である分、落差で優しさが染みるだけだと言いたいのだ

ろう。それを踏まえたうえで、さらに踏みこむ。

「心もグラリ、とか？」

「な、ないっ。絶対にならないから！」

ハツとして目を剥き、怒りの形相を向けてくる。今度ばかりは混ざり気のない、揺るがぬ意思を感じさせる表情だった。それに射貫かれて、また愛しさが膨れ上がる。

「……どんなの着けてくの？」

愛欲に満たされ張り詰めきった勃起で、咲美の股間をまさぐる。「なに」を着けて行くのかは、これで十分伝わったはずだ。

「ひゃっ！ あ……っ、ええっ？ と、智美がもう来ちやうから……ああっ」

「なら、来る前に言えばいい。ただ色を答えるだけのことだよ」

ごねながらも腰をくねらせる咲美に、ダメ押し of 言葉を囁く。

「ふあっ、あああっ」

みみたぶ
「みみたぶ 耳朶をくすぐられて背を反らし震えていた彼女の喉が、意を決したように唾を飲む。

それから、一分近くの静寂を経て。

「む、むら……さき」

咲美は今着けている下着の色を白状した。次いで夫の胸に顔をうずめ、ねっとり湿

った吐息を吹きかけてくる。それが安堵を示すものなのか、さらなる発情の表れなのか、胸にうずめた顔色が窺えずとも、想像は容易だった。

「紫か……」

藪沼に抱かれる以前の咲美は、白やベージュといった色の下着しか持っていないかった。紫や赤の下着は藪沼が己の好みを押しつけるように買い与えた物に他ならない。

当初辟易していた咲美が、最近は言われるまでもなく藪沼好みの下着を着けていく。藪沼との情交を重ねるたびに、慣れてゆく。馴染んでいる。心苦しさを覚えながらも、確かに彼女の日常に藪沼が染みついていつているのだ。

事実を、言葉を変えて反芻するほどに、下腹部の滾りが増す。いよいよ我慢ならなくなってきたその処理方法を頭の隅で考え始めた矢先。

「智……じ、時間。そろそろ出なきや、遅刻……しちやう……」

咲美が真向かいの壁時計に目を向けて、告げた。告げた後も彼女の瞳は続きを乞うように潤み煌めいていたが――。

「ん……」

咲美を抱き締めたまま、首だけ振り向けて時刻を確かめる。確かに、智美を祖父母の家に預けに寄ってから出社することを考えると、もう出なければならぬ時間だ。

「ママ、パパっ。準備できたよ」

折しも着替え終えた智美が現れ、元氣いっばいに駆け寄ってきた。不思議なもので愛娘の屈託のない顔を見た途端、暴風雨のごとく荒れ狂っていた性的欲望が急速に萎んでゆく。

「……よし、それじゃパパがじいじとばあばの家へ送ってくからな。お靴も一人で履けるか？」

まだ鎮まりきららない動悸と息遣いをひた隠し、努めて明るい声音で娘を誘導する。

「はいっ」

玄関へ駆けて行く智美の背が見えなくなるまで見つめて、改めて向き合った夫婦は、互いの毒気の抜けた顔を見て、思わず口元を綻ばせた。父と母の顔に戻った互いのことが、ただ純粹に愛おしく思えた。

「それじゃ、行ってきます」

すでに玄関で靴を履き終えているかもしれない愛娘を追うべく、椅子の背もたれにかけてあった上着を羽織り、身なりをさつと整える。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

名残惜しげに手を振る彼女をもう一度抱き締めたなら。「行くな」と、ただ一言口

にすれば。きつと咲美は藪沼との温泉旅行を取りやめる。

(……なのに)

——そっちこそ身体には気をつけて。

——藪沼の奴が我慢ならない真似をするようなら、拒んでもいいんだぞ。

愛する妻を送り出す馬鹿な夫の胸中には、尽きぬ心配と愛情はあれども、引き留める言葉はない。

「気をつけて」

やつとそれだけ振り絞った夫の気持ちすべて察して、

「うん。ありがとう」

泣き笑いめいた表情で、妻が言う。

(咲美……ありがとう。ごめんな。咲美)

感謝と詫びとが行き交う。せめて……と愛妻の肩に手を伸ばした、その瞬間。

ピリリリッ。玄関の方から呼び出し音が鳴った。咲美の携帯の着信音だ。

「ママーお電話なってるー」

さらに、呼び出し音に重なる形で、愛娘の声が届く。夫婦どちらからともなく、弾かれたように身を離れた数秒後にはもう、智美が咲美のハンドバッグを抱え持ち、駆

け戻って来た。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとう……」

娘が無垢な笑顔で手渡してくるそれを受け取らぬわけにもゆかず。流れでバッグから携帯電話を取り出した咲美が、通話ボタンに指を乗せた状態で、許しを乞うように夫を見上げた。

—— 智美に、ソイツと話すところを見せたくないんだね。

—— 智美の前では「ママ」でいたいから。

「……じゃ、智美を送ってから、会社に行くよ」

察して告げた言葉は、正解だったようだ。

咲美はホツとした様子で短く「うん」と返してくれた。

「よし。それじゃ行こうか」

「うん！ ママ、行っつきまーす！」

母とは対照的に元氣いっぱい「うん」を聞かせてくれた娘に釣られて、手を振る。手を振りながら、「はたして今の自分は、父として、夫としておかしくない表情をできているか」——そんなことばかり気になり、取り繕うのに必死だった。

「行つてらっしやい」

応じる咲美は智美の手前だからか、かなり自然な様子で母親らしい慈愛に満ちた笑顔を作り、手を振り返してくる。

——その頬が火照っているように見えたのは、気のせいか。

(……咲……美っ！)

見間違ひであつて欲しいのか、逆なのか。自分でもわからぬまま。早く行こうと急かす娘を制す傍ら、玄関の鍵を開けてから再度妻の方を振り返り、耳をそばだてる。

「もしもし」

ちようど電話に出たところだった咲美。その声は、明らかに高い。平素よりも一オクターブほど上がった声色であることに、咲美自身は気がついているのだろうか。

ときめきと嫉妬がない交ぜの心の求めに応じるがまま、一度は履いた靴を脱ぎ、再び食卓のある部屋へと足を向ける。

「あ、大丈夫。うん」

まるで友人に接するような、気さくな口調が音量を増して近づいてくる。そこに色気や媚は感じられない。だというのに強烈な焦燥感を覚えずにいられない。

(あの藪沼と。卑劣で下世話だと、蛇蝎のごとく嫌っていた相手と、こうも親しく話

すようになつてしまった。咲美は……やはり藪沼に……慣れているのだ)

「あ……」

廊下から顔を覗かせていた夫に気づき、咲美が明らかに気まずそうな顔をした。智美が見ていないことには安堵しつつ、それでもまだ彼女の瞳は落ち着きを取り戻せず
にいた。

——藪沼との関係に後ろめたさを覚えているのだから、当然だ。

——それでこそ、僕の咲美だ。

賞賛と慕情の声が内に湧きたつ一方で、相も変わらぬ嫉妬心が煮え滾る。

——藪沼と話すのが、そんなに楽しいのか。

——今夜たっぷりと可愛がつてくれる相手だからこそ、声も弾んでしまうのか。

仕組んだ当事者の立場でありながら、妻を責めるのはお門違いだ。頭では理解していても、嫉妬を抑えられない。煮沸するそれこそが「咲美を奪われたくない」という
気持ちをも最大限認識させ、愛情と性欲を炙ると知っていればこそ、やめられない。

「……じゃあ。行つてきます」

羞恥と気まずさから落ち着かない様子の妻に向け、努めて落ち着けた——その結果、
感情の伴わぬ響きとなつた声をかける。

「うん……ごめん……ね」

咲美の声が一オクターブ下がったのは、謝罪の言葉を発したためだ。それ以外の理由なんてない。馬鹿馬鹿しい勘繰りに併せて湧きたったときめきと情欲を、苦虫のごとく嘔み潰す。

間を置かず、咲美に電話を続けるよう合図して背を向ける。おかげで咲美の瞳に苦虫を晒さずに済んだ。

(こんな難儀な性癖の夫でごめん。……それでも添い遂げたいって言ってくれて、ありがとう)

感謝と詫びの気持ちを改めて直接愛妻に伝えることも叶わなかったけれど。

「……もう、違うよ。……うん、ええ？」

背中の方から、咲美の驚いた声が聞こえる。二の句から急に小声になったこともあり、内容は一切聞き取れない。それだけに妄想が掻き立てられる。

咲美は今、どんな顔で藪沼と話しているのだろうか。

——振り向いて、目にしたい。

確かに溢れている期待感とは裏腹に、足を再度妻のいる方に振り向けることができなかつた。その理由を見出せぬまま。

「お部屋へは、あちらのエレベーターをご利用になれます」

丁寧な対応に終始した男性従業員のにこやかな営業スマイルに見送られながら意に背くのは心苦しかったが、かなり上の階に停まっているのが表示されているエレベーターが降りてくるのを待つ時間も惜しい。結局、階段で部屋のある二階へと向かうことにした。

階段を上ること一分足らず。廊下を歩いてものの十数秒で、目的の部屋——二〇三号室にたどり着く。逸るあまりに震える手で鍵を差し回し、扉を開けた。

当然誰もいない真っ暗な和室一間が目飛びこんでくる。十畳ほどの畳の上には、折りたたまれた状態の布団一式と、木製の机が一つ。テレビや冷蔵庫ももちろん備わっているが、今回無用の長物であるそれらは気にも留まらない。

「……ッ」

目に映る景色の寂しさに、情けない気持ち溢れそうになり——壁のスイッチで明かりをつけるなり、ドアを気持ち強めに閉めた。鍵をかけてから靴を脱ぎ、ずかずかと部屋の中ほどまで歩んで手荷物を下ろすと、間を置かず、まだ震えている手でズボンとトランクスを一緒に掴んで脱ぎ捨てる。

（早く準備を済ませれば、その分長く、多く咲美の痴態を覗ける）

そう思うと、どれほどみつともない格好をしているかなんて、少しも気にならない。下半身裸の状態です提げ靴をまさぐり、取り出したノートパソコンを机の上に広げる。腰を下ろして靴下も脱ぎ、あぐら胡坐をかいて、いつでも自慰できる態勢を整えてから、マウスを操作してゆく。

フロントで受け取った用紙を見ながらWEPキーも打ちこみ、Wi-Fi設定を済ませる。ほどなくして、ウェブカメラ三台ともがパソコンと無線接続され、起動状態にあるとモニターに表示された。

（咲美と藪沼が泊まる部屋は、この真上。無線接続の有効範囲を考慮して、示し合わせて部屋を予約したんだ。接続できて当たり前——）

納得の理由を羅列する胸中とは裏腹に、股間が二度、脈を打つ。まだ触れぬうちから嬉々と悶える己の性器の、目一杯の反り返りぶりに歓びがこみ上げる。

（この股間の有様こそ、僕が咲美を愛しているなによりの証なんだ）

非常識極まりないと知りながら手放せず、それどころか、咲美を想うほどに強まり続ける歪な情念。寝取らせ性癖の根幹を成す、その禁忌の恍惚に、今すぐにでも浸りたい衝動に駆られもする——が。

（まだだ……。後少し、我慢しろ。そうすれば心置きなく解放してやれる……！）

荒ぶる鼻息と心拍にせつつかれながら、手提げ鞆から取り出したイヤホンをパソコ
ンに繋げ、両耳にはめる。これでようやく前準備が整った。

「咲美……っ」

乞うように妻の名を呼んでから、いよいよ動画再生ソフトを立ち上げ、今また昂つ
た肉棒の求めに応じる形で、震え通しの右手が動く。スタートボタンの上にたどり着
いたカーソルが震えによってぶれぬよう、即時クリックした。

『ソッ、ア……ッ』

直後に耳に飛びこんできた妻の嬌声は、たつぷりの媚と艶を含有していて——心が
締めつけられるのと同時に、当たり前のように左手が己が肉棒を握り締めた。

接続済みのウェブカメラ三台の内、指定した最初の一台がモニターに映し出したの
は、シングル価格のこの部屋よりも広めの和室。並べ敷かれた布団二枚が想像させる
通りの行為に励む男女の様に、また心が締めつけられる。その傍らで、やはり当たり
前に性的興奮を覚えた肉の棒が、己が手によって扱かれ出す。

「……ッ、咲美……ッ」

呼びかけても、画面の中の妻が応じるはずもない。当然のことにすら、嫉妬と歪な
情念が煮え滾る。

咲美は——全裸で仰向けとなった藪沼と向き合う形で、奴の腰の上に跨がっていた。彼女が纏っているのは、白い飾り気のないブラジャー、一枚きり。きっちりブラのカップに収まる双乳とは対照的に、丸出しの腰——藪沼好みの肉感を備えて久しい熟れ腰——が、前後に大きくグラインドしている。

頬に、肩に、腹部、腿、だらんと下げた左右の二の腕までも火照りの色に染めて。半目となり、額や首筋にうっすらと汗を浮かべた一心不乱の様相で、かつて蛇蝎だかつのごとく嫌った男との摩擦を愉しんでいる。藪沼の予告通り「完全にできあがった状態」となった愛妻が、そこにいた。

「……っ！ も、う入っ……てる、のか？」

カメラは騎乗位体勢で見つめ合う二人を正面から捉えているが、やや遠く肝心の結合部が判然としない。

——確かめたい。もっと近くで、もっとはつきりと、見たい。

正直な欲望が脳裏にひしめく、それよりも先にマウスを持つ右手がズームアップの操作を行っていた。

『お、おおう、いいぞお。咲美っ。その調子だっ』

『ンッ、ンンンッ……ふう、うっ、あ、ああんっ……』

男女の嬌声にも意識を傾けつつ目を凝らすと、上に跨がる咲美の腰だけが前後左右にくねり、そのたびに男女の密着した股間からクチュクチュと卑しい水音が響いているのが見て取れる。下に敷かれた格好の藪沼の腰は、自ずと動く気配すらない。

（動いているのは咲美だけ……藪沼に、そうしろと指示されたのか？ それとも咲美の方から、藪沼を欲しがって……？）

もう少し前から視聴できていれば容易に判別できただろうことが、想像で補わねばならなくなつたからこそ一層の苛立ちと昂奮を呼ぶ。

いつから惚けているのかもわからない咲美の眼も、喘ぐために開き通しの昏からこぼれるよだれを拭う余裕もない様も、「彼女の意思で腰を振っている」との推測を裏付けている気がしてならず。赤みの増した女陰も、男女が旅館に到着後すでに何度も絡み合っているという確信を裏付ける。

まだペニスを挿入されているのかいないのかが判然としない状況が、さらなる追い打ちとなって身に注ぐ。

「……つく、うう」

藪沼の思惑通りに滾らされる悔しさも確かにあつたが、遥かに凌駕する期待感が喜悅含みの鼓動となって肉棒の内を駆け巡り、その波に乗って上下に扱き立てる手が忙

しくなる。

(あっ！)

時同じくして、咲美の股下に、ニルンと藪沼の亀頭が飛び出てきた。淫水焼けし、今も咲美の淫水にまみれて黒光りしている亀頭は、前方にスライドして戻ってきた咲美の股肉に再び敷き吞まれていった。

『おお……濡れたマン肉が、チンポに食みついで……チューチュー吸いついてくる。ハハ、咲美の欲張りマ○コのせいで、またすぐギンギンになっちゃうな』

奇しくも藪沼の言葉が妄想を補填した。二人は素股に興じているのだ。生本番を期待した心根に一瞬落胆が広がるも——続く咲美の言葉が、新たな昂奮をもたらした。

『それはっ……だつて……あ、あぁんっ』

告げながら、また彼女の腰が大きく、前から後ろに三度続けてグラインドする。続けて背を反らし、藪沼の脚の間に手をついた分、股間を突き出す格好となつて一層の刺激を貪り出した咲美。仰け反つたその表情は、正面からでは窺えない。

隠されたウェブカメラの存在を知るよしもない妻が、汗に煌めく乳房の下弦と、藪沼の逸物を食みつける陰唇を見せつける構図は確かに魅力的で、握る肉棒の内なる煮沸に一役買う。——それでも。

(見たい。今、君がどんな顔をしているのかを見たいんだ……!)

正面の藪沼の目にも当然映らないでいる妻の表情を、独占したかった。

汗の滲む右手でマウスを操作し、別のカメラに切り替えるのに要した時間は、十秒未滿。それでも待ち焦がれてしまった胸中が、背後から咲美を映した画を見た途端に、ギョツと締めつけられる。そしてやはり、肉の棒が玉袋から装填されたばかりの熱々の種汁とともに沸き立った。

『……く、ううんっ……』

子犬が飼い主を恋しがって鳴いたかのような、甘えたがりな印象を強く感じる嬌声を吐く、彼女の顔。髪を垂らして逆さ映しとなった、その顔は—— 臉は悦を噛み締めるように閉じながら震え、逆に今にも舌が飛び出さんほどに開いた口蓋の端からよだれがひと筋垂れている。

声も、眼差しも、口腔内で嬉々と悶える真つ赤な舌も、身震いに乗じて髪が揺れ靡く様さえも、まざまざと彼女の感情を示していた。

(……! あれ、は……?)

折しも夫の目が、前後に忙しい咲美の尻たぶに、赤みの強い痕があるのを見つける。同じものは彼女の反る背、ブラの横紐との境目辺りにも見つかった。

咲美を後ろから犯す藪沼が、身を伸し掛からせながら背筋にキスをする——過去のハメ撮り映像にもあった光景がすぐさま脳裏に浮かび、妻の背と尻に刻まれたそれがキスマークであるとの確信をもたらす。

尻にキスする際に、藪沼は頬ずりなどもしたのではないか。それに対して咲美は、どのような反応を見せたのだろうか。未だ目にしていない光景については、際限のない妄想が広がる。

（嫌がった？ それとも……）

『ほらまたマン肉がチンポ吸った。今日はずっとやりつ放しだし、お互い性器に相手の匂いが染みついちゃうかもしれないなあ』

なお腰動かさぬ相手を憎々しく思っているながら、ソイツの発言に恥悦を炙られて腰を回しうねらせる。そんな咲美の今の姿を見るにつけ、妄想はより邪よこしまに傾ぐ。

続く愛妻の言葉も、夫の妄想をこの上なく後押しした。

『だって、ああ……ッン、う、動いちゃうのっ、どうしようもないっ、ああ、あつ、んああんっ』

思いを解き放った瞬間の妻の眼も唇も、悦びを示して緩んでいた。

今朝、夫と娘を快く送り出したのと同じ口が、藪沼との快樂——それも本番ですら

ない前戯行為——に溺れる己を許容する。大学時代からずっと彼女の身持ちの堅さと正義感の強さを見知っているだけに衝撃は計り知れなかった。

（咲美は変わったのだ。僕の歪な情念を受け入れたばかりに……。そして、なによりも今、藪沼のセックステクニクに溺れて……）

ハメ撮り映像を見るたびに胸を衝く二つの実感が、今夜はひと際の切なさを伴って、歪な滾りを手繰り寄せる。

「……っ、うう」

握りを強めて上下に扱く手がカリ首と擦れるたびに、情けない喘ぎがひり漏れた。バクつく尿道口からは先走りのツユが止め処もなく垂れ滴り、それすら潤滑油として、自慰に励む手の動きが速まる。

『だよなあ。朝まで、まだまだセックスできちゃうって思ったら、一分一秒だって惜しい。同じ気持ちだよ俺も』

告げる藪沼の余裕ぶりが憎々しい。

（その点は咲美だって変わらない……はずなのに）

複雑な感情を胸に押しこめ、再び正面のカメラ映像に切り替える。

彼女の腰は止まっていない。それどころか藪沼の胸の上に両手を立て、前傾姿勢と

なつて、相手の意を窺うように涙目で見つめがら腰を前後左右にうねり回らせ始めていた。摩擦に伴う音の響きもよりねちっこい淫猥なものに育つてゆく一方だ。

『ア……は、ああ……イイッ……』

あまつさえ、藪沼の同意を得て安堵したのか、溜息の後にととうとう声に出して歓喜を伝えてしまった。ホッと綻んだ「普段の彼女」を思わせる表情の上に、肉欲に興じ続けるがゆえの蕩けが乗っているという現実が、この上なく寝取らせ性癖を刺激した。（どんな咲美も知りたいと願った。たとえばそれが、僕には再現してやれない類のものであつたとしても……）

なればこそ、今日にしている咲美の有様が、狂おしくも愛しい。

『朝から、何回イッた？』

『あつ、ああつやあつ、んっ、わ、からなつ、数えきれないっ』

『じゃあマ○コに中出しされたのは何回？』

『え……っ、ン……さ、三回……』

今朝から順に思い出して数えたのだろう、一刻の間を置いてから答えた咲美の股座から染み出す蜜の量が増して見えるのは、おそらく気のせいではない。思い返して昂奮した、その証として藪沼に知らせるために染み出させたのではないか。

そうした視覚効果に滾りを煽られる一方で、

(三回。……たったの?)

駅での待ち合わせ時刻と、駅から旅館までの車での所要時間を考えると、遅くとも昼前には旅館に着いたであろう二人のまぐわいの回数としては、少なすぎる気がした。しかし、その疑問もすぐに氷解する。

『口に、胸に、後腋もか。他には、どこにチンポ擦りつけたっけ?』

『……髪の毛』

『ああ、そうだ。口に出した後に、咲美の髪でチンポを拭いたな!』

明かされていく淫らな実態に、眩暈めまいを覚える。自慢げに語る藪沼に対し、咲美は髪のことを告げた瞬間から膨れっ面をしていた。

『髪の毛につくと、なかなか取れないんだからね』

続けて語った声音は、悪戯坊主を叱る母親のようでもあり、拗ねつつも恋人の悪戯を受容する女のそれとも思え——いずれにしろ、藪沼相手に放つにはあまりに気安い。少なくとも夫の目には、邪気のない表情と併せて、そう映った。

(確かにここ何か月かで、咲美の藪沼に対する物腰が柔らかくなったとは感じていた) だからこそ、今朝も藪沼と通話する咲美の姿に後ろ髪をひかれたのだ。しかしそれ

はまだ「不道徳な関係を結んだがゆえの気安さ」と言われれば納得する範疇だった。今しがたの咲美の言動は、そうではない。

（今日はほぼ丸一日を藪沼と過ごして、肌も重ね続けているから。だからなのか？ つい、ほだされて……？ 今だけか。それとも……）

咲美と藪沼の双方に尋ねたいことは無数にあったが、それらを吹き飛ばす話を、今また藪沼が始めた。

『これ、使った時も凄かったねえ』

藪沼が右手に持って示したのは、ウェブカメラが映した当初から枕元に置いてあった物体。筒状の白い胴体の先に、丸い灰色の回転部がついたそれは、ハンドマッサージ器。肩や腰のコリをほぐすために用いられる健康器具だ。

枕元にあった時からコンセントに繋がれた状態にあったそれが、藪沼がスイッチを入れることでウインウインと唸りだし。咲美は息を呑み、白い器具を食い入るように見つめていた。

妻と同じく瞬き一つせず凝視する夫の内にも、妻に負けぬ期待が渦を巻く。アダルトビデオなどでそれが用いられる際の用途を知っていたため、目にした当初から「もしや」と頭の隅で考えてはいたのだ。

そんな夫と、夫が想像する通りの用法をすでに身をもって知っているであろう妻。双方の視線を誘導して、マッサージ器は今なお腰振りをやめないでいる咲美の恥丘へと向かった。

『ダメっ。それ、もうやだからねっ』

言葉ばかりの拒絶をよそに、器具の回転部が汁濡れた女陰の上端に密着した。

『ひあっあああああ！』

器具の駆動音に、回転頭部が愛液と先走りの混合汁を弾く音と、咲美のつんざくような嬌声が被さって、時同じく彼女の股から飛び出した藪沼の逸物が脈を打つ。

「藪、沼あああ……っ！」

明らかかな歡喜を目視させた藪沼への憎悪が募る一方で、その怒りを糧にして、負けじと己が肉の棒も喜悅混じりの疼きを鼓動として解き放ち続ける。

『ああっあああああ！』

マッサージ器の振動によって震えて響く愛妻の嬌声に引つ張られ、振動が直撃しているクリトリスが震えながら蜜散らす様を、ズームアップさせた正面カメラ越しに凝視する。

「そんなに……いいのか。咲美」

未経験の刺激の程は、喘ぎ狂う妻の姿から推し量るしかない。

(また、咲美の中に僕の知らない部分が増えた)

——せめて、今は一切を見逃さぬようにしなければ。これ以上、増えぬように。

菌痒さと苛立ちも火種として、自慰の手を速める。いつしか大量の先走りに濡れていた肉幹は、より粘着質でありながらスムーズな上下摩擦を可能にしている、一足飛びに上昇した摩擦の熱と刺激に、意識が引きずりこまれてゆく。

『ほれほれ、ほれ。このまま、またお漏らししてもいいんだぞお』

藪沼が、器具の頭部で咲美のクリを集中攻撃しながら、また一つ暴露する。

「くっ……くっ……くっ」

奴の勝ち誇った物言いが痲に障るほど、肉棒の内に奔る滾りも熱と勢いを増した。それにせつつかれるように、手の上下運動も際限がない。荒ぶる息を吐くたびに腰の芯底に響く悦なる疼きが、視線を一層画面に食い入らせるのだ。

『やつ、あああ！ お漏らしやあつ、やだ、ああああつ』

幼子のように首を振ってイヤイヤをしながらも、咲美の腰は素股に励み続けている。

『ああ、そーいやもう、着替えないんだっけ？』

マッサージ器の頭を咲美のクリトリスにピンポイントで当てたまま、藪沼が言う。

咲美は念のためにと、四回分の下着の替えを持っていったはずだ。それが一枚も残さず、藪沼との性交の中で使い物にならなくなった——長時間に及ぶまぐわいの密度の濃さを感じさせる事実にも、また手中の肉幹が滾った。

『最初に脱がして、俺の好きな紫のパンティが出てきた時には感激したな。で、つい最初の一発もパンティにべっとり塗りこんじまって。二枚目はお漏らしだろ。その次が——』

『う、ああ！ あああああつ、バイブつ、止めつ、やあああつ』

嬉々と語る藪沼をよそに、咲美は一層切迫した様子で訴える。

その一方で汗気の増した接合部に亀頭が顔を出す直前には必ずカリとの摩擦に酔って指咥え、喉反らせ、胸張って鳴き、飛び出てきた亀頭に真新しい蜜を塗りつける。

『ああ、又チュ又チュ、ドロッドロだねえ……これだと……くつく』

『は、入っちゃ、うううつ』

藪沼の含み笑いから言葉を引き取る形で紡がれた、その声音は、先の子犬が飼い主を恋しがって鳴いたかのような嬌声と同種の、甘え媚びる印象を強く与えるものだ。

『はあ、あつ、ああんつ』

咲美の腰が前後のグラインドの合間合間に、上に浮く動作を加え出す。

藪沼の腰も動き、ピンと勃った奴の逸物が咲美の股の穴を探るように擦れていた。

二人の息遣いが次第に重なり始め、ひと擦り浴びるたびに咲美の下腹肉が小刻みな痙攣けいれんを見せている。それこそが、焦らしを重ねる藪沼、咲美のGスポットに逸物を押しつけられる藪沼だけが咲美に体現させられる、屈服のサインだ。

(もう……我慢できないんだね、咲美……)

嫉妬と羨望の眼が見つめる先で、藪沼が電動マッサージ器を布団の隅へ捨て、

『おっ、ほおおっ』

『ふ……っああああ!』

直後に絡み合う二人の感極まった喘ぎが迸る。その意味を即時理解して、背後からカメラ映像に切り替えた。

画面に大寫しとなったのは、愛する妻の尻が深く沈む瞬間。そして、すでにずっぽりと膣の内に咥えこまれた藪沼の逸物が、再び振り落ちてきた咲美の中に我が物顔で埋まっていく瞬間だった。

『入っ……ちゃったねえ……っ、また』

また、とはつまり、前日もこうして挿入を果たしたということなのだろう。

感慨深げにこぼした藪沼が、ついに腰を振り上げ。

『んあんっ!』

子宮を不意打たれた形の咲美が、それでも腰を八の字に回し出す。突き上げは男に任せ、自分は横の回転でより貪ろうというのだ。過去のハメ撮り映像でも幾度となく披露された息の合った連携に、魅入られる。

『あああ……っ!』

前のめりになって藪沼の胸の上に手をつき直した咲美の視線が、あらぬ方角を向く。藪沼が設置したハメ撮り用カメラに視線を送ったのだ、と理解した瞬間に、傍観者たる夫の心身はひと際の充足に酔い痴れた。

愛妻が、映像を見る夫を意識してくれていることが嬉しい。それにより昂る性癖に目覚めている妻とともに上り詰められそうな予感が、肉棒に滾っていることが、手淫の速度と熱にも直結した。

『ねえ、もうそれ、取っちゃいなよ』

藪沼に言われて、咲美がブラのカップに手を添える。すでに玉の汗が浮く乳房を包むそれが疎ましくなったから、外すのだ。それだけのことと思っていた。

『あはっああア……っ!』

藪沼の突きを浴び上ずった声を吐き出した妻の手が、ブラを外すのではなく乳の上

にたくし上げ。こぼれ出るなり縦に弾んだ右の乳房、その乳輪に残されていた痕を目にするまで、なにかを隠すためにつけていたなどとは思ひもしなかった。

『ぼれ、すりすり〜』

痕をつけた当人だろう藪沼の手指が、咲美の両乳輪を擦る。

『くうっ、んっ、ふあっあああっ』

もどかしい刺激を浴びた咲美の腰が一層、藪沼のペニスを根元まで頬張った状態でくねり舞い。菌形——そうとしか思えない痕のついた乳房が、また嬉々と弾んだ。

（咲美の胸を、噛んだ。藪沼が、奴の菌が、咲美の胸に……）

食い入る瞬間にも、妻は今しがたと同じように、涙交じりの、悦びにまみれた声を漏らしたのだろうか。想像しただけで、握り擦る手中のペニスの滾りが増進する。

『噛んだ瞬間にギュッと締まって、堪らず中に出しちゃったんだよな』

思い出し笑いをして、藪沼の右手が咲美の右乳輪を絞り出すように強く揉む。

『やつ……！　そ、そつちっ、ダメっ、一緒に駄目えええっ』

駄目と言いながら咲美の腰の前後のグラインドは大きく、より長く強く摩擦を貪る動きに進化する。

（そつち、というのは胸のことか）

そう理解した矢先に、藪沼の左手が咲美の腰に回っていることに気がついた。

(尻肉を揉んでるのか?)

奴の指が尻たぶに食いこんでいるのは見て取れたが、それ以上のことは正面からではわからない。背面からの映像に切り替えようかと思いついてうちに、藪沼の左手は咲美の尻から背に移ってしまい、追及できなくなった。

藪沼の腕に抱き寄せられた咲美は一切の抵抗なく、こぼしたての乳房を毛むくじやらの胸板に押しつけている。その、押し潰れて横にこぼれる乳房の艶めかしさに目を奪われたのも、束の間。

『ン……ちゅっ……』

当たり前のように二人が唇を重ね、舌を絡め出す。キスのさなかにも二度三度と、ハメ撮り用カメラに流し目を送る咲美に、心を驚掴まれてしまった。愛妻の妖艶極まらない視線が、最もよく見えるカメラはどれか。正面、背面、右側面と順繰りに、忙しく切り替えて探る。

最後の勘違いが解けたのは、そのさなかのことだった。

切り替えは二巡目に突入し、モニターには背面からの映像が映っている。

『ン! んんっ、ふっ、んふううううっ』

キスしながらくぐもった鼻息を漏らす咲美の尻がなおも激しくくねり、藪沼の腰に突き上げられては、ズブズブと逸物を呑み食んでゆく。その様にまず、焼けつくような心持ちでいながら惹きつけられる。思わずズームアップすると、その尻の谷間に深々潜る藪沼の太い指、そのあからさまな動きが露わとなった。

『んんっ！ お、お尻っ、一緒にはやめてっって言っ、やっ、んんあ……っ！』

『ハハッ、いいじゃんいいじゃん。感じまくって馬鹿になっちゃえ！』

過去のハメ撮り映像でも、何度か、咲美の肛門が触られたり、弄られたりしていたことはあった。けれど――。

（その時の咲美は、これほど幸せそうな顔をしていただろうか――）

今、藪沼の指一本を肛門に咥えこんだ愛妻は、涙目と涙声で、けれど確かに口元を綻ばせている。出し入れされる指の動きに助勢するがごとく腰を動かして、逸物との摩擦まで堪能しているのだ。

藪沼と視線を交わす姿からは「幸せそう」の一言しか浮かんでこなかった。

『こっちもいくぞオッ』

『ひっ！ やはあっああっひっあっああんっ』

藪沼の腰遣いがよりねっとりしたものに変わり、咲美の声の逼迫がより真に迫る。

咲美の方からも強い密着を望んで、根元まで肉棒を頬張った状態で腰が回され出す。噛み痕の残る乳首も、勃起し通しのクリトリスも自ずと藪沼の肌と擦り合わさって、ひと喘ぎごとに声のトーンが上がっていく。

どれも見覚え、聞き覚えがあった。

(僕のじゃ届かない、咲美の子宮が執拗に擦られてる)

子を育むためのそこに、絶頂癖をつけたのは他ならぬ藪沼だ。その藪沼とのセックスで必ずと言っていいほど、視線で、手や脚や腰の動きで、子宮イキをねだる咲美。

幾度となくハメ撮り映像で目にした光景の再現。それが今この時、真上の部屋で行われているのだと思うと、胸が張り裂けそうになると同時に、いよいよもって我慢の限界を迎えようとしている肉棒を叱咤せずにはられない。

『次は何発目だっけえ!?!』

『よんっ、四回目えっ、ふあっああああ!』

当然のごとく膣内射精回数をカウントした咲美に、また藪沼のキスの雨が降る。咲美の首筋にキスマークを刻み、改めて唇を強く吸った藪沼の腰が縦に跳ね上がり始め。奴の手指に尻肉をがっちり抱き留められた咲美の腰も、グリグリと押しついていく。

咲美のうなじから下る曲線の脇で盛り上がる肩甲骨と、たくし上げられたブラの横

紐との間に汗が幾粒も流れ落ちる。その様すら煽情的に映る中で、また重なり、喘ぐために離れた男女の口腔をねばついた唾液の糸が繋ぐ。繋がりが続ける性器同士がグチュグチュと猥褻な音色を響かせて、さらなる密着を望む双方ともに相手の首へ手を回して抱き合っていた。

『ほんと俺たちちつて相性抜群だよなあっ』

ウェブカメラに目を向けて告げられたそれは、さながら勝利宣告。

『んっふっあっあああああっイツ、あああっ、お尻っ、もっ、どっちもっ、イクうううっ』

穿^{ほじ}られる尻と、捏ね叩かれる子宮。排泄穴と、孕み穴。相反するはずの二つで同時に法悦を得んとしている妻もまた、ハメ撮り用カメラに目を向ける。

「咲美っ！ く、うううっ」

愛する妻の視線が一番よく映る右側面からの映像に切り替えて、藪沼と自分を置き換えた妄想に浸る夫の手中で、擦り続けられたペニスがいよいよ射精の時を迎えようとしていた。

——咲美、愛してる。

今すぐ伝えたかった言葉が、快感の呻きによって出遅れる。

『おおおっ、咲美っ、愛してるぞおっ！』

夫が告げて然るべき言葉を先んじて発した藪沼の腕の中で、咲美は甘えるように鼻先を摺りつけ。

「ふざけるなっ、咲美の身体だけが目的のくせにつ……！」

先のどもりが嘘のように明徴に、反論が紡ぎ出る。時間にして十数秒のそれがそっくりそのまま、絶頂に向かう映像の中の男女とのずれとなる。

『イイっ、このまま……きてっ、きてええええっ！』

焦りと怒りに吞まれた夫の言葉を掻き消す勢いで、咲美が早口で乞う。

ハメ撮りが始まった当初より肉体の相性の良さを立証し続けてきた二人が、目線も、息遣いも、腰の動きもびつたりと合わせて至福の瞬間に向かい駆け上がったいく。

「っく、うう、咲っ、美いっ」

愛する妻が他人棒に啼かされる様を傍観することで最上の快楽を得る己の変態性を恨むほどに、自慰の速度と熱が上がる。湧きたつ疎外感も、それを癒して余りある咲美の再度のカメラ目線も、膨張しきった種汁が尿道口目掛け迫り出してゆくための推進剤となってくれていた。それでも、出遅れを取り戻すには至らない。

『咲美の欲しいところ全部っ、全部埋めてやるぞおっ』



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

リアルドリーム文庫

小説: **空蝉** 挿絵: 猫丸

原作: ナオト。

(サークルN.R.D.WORKS)

緻密な心理描写で話題を博した
人気同人ゲームが小説化!

ヤブヌマ



全国書店、各電子書籍サイトにて好評発売中!